

2018/5
No.275

WAC

WONDERFUL AGING CLUB

長寿社会文化協会

2018年5月31日発行 通巻275号

<http://www.wac.or.jp/>

E-mail: iken@wac.or.jp



ふれあい Wonderful Aging Club Network and Communication ねっと



第8回「ふれあい」全国交流会

開設講座の受講生が発表

「カフェを語る」、認知症カフェも

- ▼ 過去最高54件の「福祉サービス第三者評価」
- ▼ 「新しい総合事業」で府中・八王子市の研修を受託
- ▼ 利用者が3年連続20万人超の「ふれプラ」（我孫子市）
- ▼ 川崎市の「介護職就労支援事業」で55人の受講生





小林里美
常務理事

WACC創立30年

思い起こす両会長の言葉

WACCが社団法人として誕生したのは、1988年4月22日です。それから30年が経ちました。

WACCで24年の活動

私はWACCに入ってから24年ですが、この間でも激動の歴史を垣間見て参りました。阪神・淡路大震災があり、NPO法の成立と介護保険制度の開始、公益法人改革、それに東日本大震災。初代の下河辺淳会長、引き継がれた一番ヶ瀬康子会長とともに鬼籍に入られました。社団法人の財産は人です。下河辺会長は初代会長として、それまでにない市民の集まりとしての社団法人長寿社会文化協会の黎明期に意味づけを成されました。

一番ヶ瀬会長は福祉を「幸福」と定義づけされた方でもあり、ヘルパー研修や高齢者疑似体験で活動が広がっていったWACCの成長期を支

えてくださいました。恩人との別れもあれば、まだまだご健勝で続けてくださっている会員の皆さんもいらっしゃいます。

全国の会員と交流を

先日、宮城県で行われた全国セミナーに参加する機会を得ました。テーマは「10年後、20年後を見据えた地域づくり」です。

被災者支援から地域づくりへの展開、宮城県内全市町村の取り組み発表、市町村支援における国・県の役割と三部構成になっており、今後の指針の参考となる会合でした。

会合の後、仙台市で長年活動しているWACCポイント「WACCまごころサービスマヤギ」代表の横濱敬子さんと東北の美味しいお料理を肴に旧交を温めることができました。

現在、WACCの本部事業は首都圏に集中し、全国の会員の皆様との交流がままならない状況です。年1回の総会時にポイント活動の発表を

していただいています。こちらも現地訪問する双方向の交流が理想的であるのは明らかです。

新しい役割を創出

WACCは長寿社会文化の形成に向けて高齢者福祉を中心とした啓発活動、生きがい活動を推し進めてきました。WACCが置かれた状況は時代とともに随分変わり、役割も変容してきました。

国は人口減少の中で高齢社会を活力あるものとするため、「総合事業」に元気な高齢者による助け合い活動や介護予防となる自発的な生きがい活動を組み込み、さらに推奨していくようになっています。

超高齢社会に突入した中、WACCは今後、さらに役割を見つめ直し、小さいながら公益社団法人として存在し続けている意味を問い直さねばならないかと思えます。年月とともに変わったWACCですが、培ったものや刻んだ歴史に変わりはありませんから。



Community
Cafe

開設講座

カフェ現場などを会場に 東京・千葉で3期実施



WACの近くにある「芝の家」を見学（2月10日の東京講座）

WACは2017年度、コミュニティカフェ開設講座を、東京圏のカフェ現場などを会場に3期開いた。

.....
認知症カフェ・
ケアラースカフェ
開設講座
.....

最初に7～8月、東京都港区のWAC研修室で「認知症カフェ・ケアラースカフェ開設講座」を開いた。全4回14・5時間、受講料1万5千円で行った。前年度の2～3月に初めて認知症カフェをテーマにした開設講座を行ったところ、延べ22人と予想以上の参加者を集めたからだ。

17年度は女性9人、男性6人の計15人が参加した。

職場代表の受講生が多数

「業務でオレンジカフェを開催しているが、より良いカフェを運営していきたい」「勤務先の社会福祉法人のデイサービスで、認知症カフェを開くことになった。良いところを取り入れながら、オリジナルなものを考えていきたい」――。

既に始めている認知症カフェの運営方法を再検討したいという、地域包括支援センターや認知症疾患医療センターなどの職場を代表して受講した人が多かった。一方で、個人的な理由で参加した人もいた。東京都葛飾区の石井静香さんは「在宅で要介護5の義母、通いで要介護1の伯母を介護しながら、介護相談員として施設を回っている。利用者の家族をサポートしながら自分のできることに挑戦したい」と参加した。

また、千葉県船橋市の伊藤明子さんは「90歳の母が家をリフォームして10年前に始めたデイサービスを先日、閉じた。利用者の家族に認知症カフェを望んでいる人がいるので、そこで開けないかと参加した」という。

地域別では東京圏在住者がほとんどだったが、山形県酒田市の佐藤理子さんは「デイサービスを嫌がる母の居場所にもなるカフェをつくりたい」と、早朝の飛行機に乗って通ってきた。

第1回講座

運営者に事例発表してもらったあと、交流会（質問タイム）を2セット行った。

形山昌樹さん

「すももCafeでは、グループホームに入居する認知症の人にウエイトレス役をお願いし、生きがい・やりがいを感じてもらい、同時に地域の多くの方に、認知症の方でも働けることを知ってもらっている」

新井尚子さん

「八王子市内で高齢者福祉施設や保育園を経営する9カ所の社会福祉法人の理事長が集まって、2011年7月に八王子福祉会を結成、15年2月から『八王子ケアラースカフェわたぼうし』を開いている」

高橋瑞穂さん

「9人全員が専門職のメンバーで始め、週3日の開店日に平均20人の来客がある。相席になったり、ランチを一緒にとったりすることでつながりが広がっている」

阿久津美栄子さん

「介護者は地域で孤立し、助け合える関係性もなく、家族にも頼れないどころか相談さえできないという人が多い。気持

● 2017年度認知症カフェ・ケアラーズカフェ開設講座のカリキュラム

回	日程・会場	内容・講師
1	7月8日① 13:00～17:00 WAC 研修室	<p>●認知症カフェ事例発表 すもも Cafe (千葉県船橋市・コンフォートケア代表取締役 形山昌樹さん) … デイサービスの定休日に施設を活用、当事者が運営に参加するカフェ 八王子ケアラーズカフェ わたぼうし (東京都八王子市・八王子市高齢者あしん相談センター子安 新井尚子さん) … ほぼ毎日開設、地域包括支援センター近接のカフェ 認知症カフェ かさね (千葉県市原市・認知症カフェかさね代表 高橋瑞穂さん) … 民家で週3回、認知症ケア専門士会の有志らが運営するカフェ 認知症カフェ おれんじ (東京都小金井市・NPO 法人 UPTREE 代表 阿久津美栄子さん) … デイサービスの定休日に NPO 法人が運営するカフェ</p> <p>●交流会 (質問タイム) × 2 セット</p>
2	7月17日②③ 13:15～16:00 D カフェ・ラミヨ (東京都目黒区五本木 1-5-11)	<p>●現場見学・講義 ・認知症の症状と対応 竹内弘道さん (東京都目黒区・NPO 法人 D カフェまちづくりネットワーク代表) … 区内 10 カ所の D カフェを運営する認知症カフェの第一人者。自宅を改装した D カフェ・ラミヨをはじめ、区内各地からの要望に応え、デイサービスや病院内の D カフェ開設をプロデュース。参加者が水平で対等な関係で過ごす場づくりを目指す。 ・地域包括ケアと認知症カフェ 浅川澄一さん (福祉ジャーナリスト)</p>
3	7月29日④ 9:45～16:00 (昼休み 1 時間) WAC 研修室	<p>●布川佐登美さん (千葉県柏市・ケアラーズ&オレンジカフェみちくさ亭 / オレンジカフェ「ほのぼの亭」、NPO 法人ケアラーネットみちくさ理事長) … 自らの介護体験を機に、介護者が息抜きやおしゃべりができる居場所を実家に開設。市の介護予防センターで認知症カフェも開催。 ●講義：コミュニティカフェでのケアラーズ支援、認知症カフェの役割、どのように地域を巻き込むか ●ワークショップ：どんな認知症カフェを立ち上げるか</p>
4	8月6日⑤ 9:45～13:00 WAC 研修室	<p>布川佐登美さん 浅川澄一さん ●各自のカフェ運営プランの発表 (個人、もしくはチームで) ●参加者全員で感想を伝えよう。 ※講座終了後、交流会 (希望者のみ)</p>



認知症カフェ運営者4人の事例発表を聞いた (7月8日)

第2回講座

福祉ジャーナリストの浅川澄一さんは「社会全体で認知症の人々を支える仕

ちを共有できる人が自然に集え、お互い励まし合ったり、話を聞き合ったり、情報交換したり、いつでもフラットと立ち寄れる、心の居場所のような場所を目指している」

組みとして認知症カフェがあり、福祉制度の枠外活動として急増している。コミュニティカフェや交流サロンが生活支援サービスの中に位置づけられ、総合事業の住民主体のサービスとして行われている」と話した。

「Dカフェ」を主宰する竹内弘道さんは「認知症のことを、誰もが自分のこととして考える、街の交流ステーションとしてDカフェを始めた。認知症の人と介護者を分けないで、医療・介護・市民が連携して地域で向き合っていきたい」と話した。そして、目黒区内に10カ所あるDカフェを紹介し、会場費、看板・のぼりなどの初期費用、消耗品費などについて説明した。受講生は講座期間中、原則、Dカフェを1カ所以上見学した。

第3回講座

布川佐登美さんは、母を介護し、看取った実家で始めたケアラーズカフェと、柏市の介護予防センターで行っている認知症カフェの運営状況を説明した。そして、グループワークとして、認知症の人と家族に来てもらう工夫、ボランティアの確保策、資金調達方法などを考えてもらった。そのあと、各自、布川さんが考案したフォーマットに書き込み、認知症カフェの企画書やチラシ案を作成した。

第4回講座

フォーマットに従った企画書や独自の事業計画書を作成した人がプランを発表

し、2人の講師がコメントと質問を述べた。思いや実現性などを評価し、全国交流会で発表する人を選んだ。ほかの受講生が「協力ができそうな点、こうすればもっと行きたくなると思う点」などをシートに書き込み、発表者に渡した。

コミュニティカフェ開設講座 千葉

続いて、9月10日に千葉県福祉ふれあいプラザの出張県民研修として、特に分野を限定しない「コミュニティカフェ開設講座」を千葉市中央区の千葉市民活動支援センターなどで行った。

こちらは全7回21・5時間で無料であるが、千葉県民対象のため、ネットで広域から集めることができない。また、15年度から千葉市に後援をもらい、市内の公民館やコミュニティセンターにチラシを置いてきたが、施設の利用者層と合わないのか、目立った効果が見られなかった。

このため、認知症カフェ・ケアラーズカフェで反応がよかった、チラシのFAXを地域包括支援センターや市町村の地域包括担当部署に送るということも行った (一部はメールも併用)。

また、全国紙の支局や千葉日報に働きかけ、4紙に告知記事を載せてもらった。単回参加も可としたので、現場見学にだけ参加した人も含めると、女性30人、男性11人の計41人が参加した。



「カフェ福堂」の運営者・松尾二郎さん（左）の話を聞く（9月23日）

● 2017年度コミュニティカフェ開設講座（千葉）のカリキュラム

回	日程・会場	内容・講師
1	9月2日④ 9:45～12:50 千葉市民活動支援センター	小泉圭司さん（元気スタンド・ぶリズム合同会社 代表） ●コミュニティカフェってなんだろう？ 講義：自己紹介、コミュニティカフェって？高齢者向け・子育て・コミュニティレストランなど事例紹介、生活支援・介護予防サービスとしてのコミュニティカフェ ※課外に見学（希望者のみ） まる空間（千葉市中央区富士見 2-12-4）
2	9月9日④ 9:45～12:50 千葉市民活動支援センター	小泉圭司さん ●自分の周りにどんなコミュニティカフェがあればいいだろう ワークショップ：身の回りの地域課題、社会資源、ネットワークを調べよう。自分のやりたい活動内容発表
3	9月23日④⑥ 10:00～12:00 あかりサロン稲毛 13:00～15:00 カフェ福堂	●コミュニティカフェ見学・体験 あかりサロン稲毛（千葉市稲毛区稲毛東 2-16-1） カフェ福堂（千葉市稲毛区小仲台 2-5-12） ※課外に見学（希望者のみ） カフェ早起きうさぎ（千葉市稲毛区園生町 1223-1 稲毛パークハウス A-101） ウエルカフェ千葉園生店（千葉市稲毛区園生町 880-1）
4	9月30日④ 9:45～12:50 千葉市民活動支援センター	布川佐登美さん（NPO法人ケアラーネットみちくさ 理事長） ●講義：カフェでのケアラーズ支援、ケアラーズカフェの役割、認知症カフェの現状 ●ワークショップ：認知症カフェの企画書やチラシ案の作成
5	10月14日④ 9:45～12:50 千葉市民活動支援センター	堀内龍文さん（税理士、堀内会計事務所 代表） ●講義：コミュニティカフェのマネジメント ・経営に必要なもの、収支・資金計画、カフェを続けていくためのマーケティング
6	10月17日⑥ 10:00～12:00 袖団カフェ 13:00～16:00 和みかふえ	●認知症カフェ見学・体験 袖団カフェ（習志野市袖ヶ浦 3-5-3-1 袖ヶ浦団地集会所） 和みかふえ（千葉市美浜区高洲 1-16-46 cafe どんぐりの木） ※課外に見学（希望者のみ） ブルーカフェ（千葉市中央区中央港 1-20-21 グランスイートブルー 1 階）
7	10月21日④ 9:45～12:50 千葉市民活動支援センター	小泉圭司さん 堀内龍文さん ●各自の事業計画の発表（個人、もしくはチームで） ●参加者全員で感想を伝えよう。 ※講座終了後、交流会（希望者のみ）

グループ参加が多かった

この期で多かったのは、FAXや新聞を通じて開催を知って友達と連れ立って参加した人たちが。6グループ、17人がそのような人たちだった。

長生村の斉藤美恵子さんや米倉茂子さんは1年前から、コミュニティセンターで歌や踊りなどのにぎやかな催しが多いサロンを月1回行ってきたが、静かに

話をしたり、絵手紙・書道・茶道などの講座を受けたり、ランチも楽しめるカフェを別に開けないかと考えていた。FAXが届いた村役場職員に勧められて、4人が交代で参加した。

大原みち江さんと大町昌枝さん、平塚家子さんの3人は、流山市にある障害者の就労支援施設で喫茶コーナーやリサイクルショップを運営した仲間。

大原さんが新聞の告知記事で講座を見つけ、ほかの2人を誘った。「仕事を辞めて、地域に戻ったところ、住宅が増えて環境が変化していることに気づいたので、仲間づくりがしたかった。受講したことにより、自分たちの考えがはっきりし、開設するイメージができた」という。

第1回・第2回講座

小泉圭司さんがコミュニティカフェの役割・目的を話したあと、総菜店や子育て支援と世代間交流の拠点を加えた「コミュニティモール」構想、レンタルセニアカー（ハンドル型電動車いす）による外出支援、暮らしの保健室、元気スタンドが事務局となっている地域支え合い事業などを説明した。また、元気スタンドを例に、内装工事・厨房機器などの費用、運転資金などの金銭面、開業に必要な資格・届け出などについて話した。

そのあと、受講生は班に分かれ、身の回りの地域課題の解決のために何をすればいいか、何が必要か、どんな地域資源とつながるかを話し合った。

課外に、会場の近くにあるキッチン付きレンタルスペース「まる空間」を希望者が見学した。

第3回講座

講座内の2カ所以外に、いずれも千葉市稲毛区にある、前年の受講生の及川幸子さんが開いた「カフェ早起きうさぎ」と、ウエルシア薬局が地域貢献の一環として無料で開放しているフリースペース「ウエルカフェ」を希望者が見学した。

第4回講座

認知症カフェ・ケアラーズカフェ講座の第3回とほぼ同じ。

第5回講座

税理士の堀内龍文さんが「創業に必要な会計と税務のポイント」を解説し、価格や売り上げなど事業計画書の数字の立て方を説明した。

第6回講座

午前中は習志野市の団地集会所、午後には千葉市美浜区の喫茶スペースを借りて行われている認知症カフェに参加した。

課外に、千葉市中央区の日替わりワンデーシエフの「ブルーカフェ」を希望者が見学した。

第7回講座

認知症カフェ・ケアラーズカフェ開設講座の第4回とほぼ同じ。

● 2017年度コミュニティカフェ開設講座（東京）のカリキュラム

回	日程・会場	内容・講師
1	1月27日④ 9:45～14:15 (昼休み1時間) メサ・グランデ (川崎市中区新城 5-2-13)	田代美香さん (NPO 法人ぐらす・かわさき 副理事長・事務局長) ●現場見学・ランチ体験 ●参加者の現状と取り組み内容、参加動機と目的 ●講義：なぜ、コミュニティカフェが求められているか？ぐらす・かわさきとたまり場事業、「たちはな農のあるまちづくり」推進事業とメサ・グランデ、飲食店経営の基礎 ●ワークショップ：やりたいコミュニティカフェと顧客ターゲット ※課外に武蔵新城のコミュニティスペースを見学（希望者のみ）
2	2月3日④ 10:00～16:00 (昼休み1時間) 元気スタンド・ぶりズム、 幸手団地集会所 (埼玉県幸手市栄 3-9)	小泉圭司さん (元気スタンド・ぶりズム合同会社 代表) ●現場見学・ランチ体験 ●講義：コミュニティカフェってなんだろう？ 高齢者向け・子育て・コミュニティレストランなど事例紹介、生活支援・介護予防サービスとしてのコミュニティカフェ、コミュニティカフェだけでなく、総菜店などでのコミュニティモールとしての取り組み、創業から店舗運営まで一資金調達、資格、許認可、内装工事、必要経費などについて、事業計画の進め方 ●ワークショップ：地域の課題を上げてみよう。身の回りの地域課題、社会資源、ネットワークを調べよう。自分のやりたい活動内容発表
3	2月10日④ 9:45～16:00 (昼休み1時間) WAC 研修室	堀内龍文さん (税理士、堀内会計事務所 代表) ●講義：コミュニティカフェのマーケティングー宣伝広告と営業手法（メニュー開発、価格設定、仕入・原価管理、店舗レイアウト、市場調査等）、マネジメントとお金（必要な手続き、資金の調達から収支計算、税金の話） ●ワークショップ：事業計画書作成演習 ※課外に見学（希望者のみ） 芝の家（東京都港区芝 3-26-10）
4	2月17日④ 12:30～15:30 (昼食後、講義) Cafe ハートフル・ポート (横浜市旭区 南希望が丘 58)	五味真紀さん (Cafe ハートフル・ポート 店主) ●現場見学・ランチ体験 ●講義：多世代交流型「住み開きカフェ」ハートフル・ポートの活動紹介、住宅街の「住み開き」カフェが果たす役割と運営する上で大切なポイント、地域食堂、認知症カフェなど色々なイベントを成功させる秘訣 ※課外に横浜・大和市内のカフェを見学（希望者のみ）
5	3月4日④ 9:45～13:00 WAC 研修室	小泉圭司さん 堀内龍文さん ●各自の事業計画の発表（個人、もしくはチームで） ●参加者全員で感想を伝えよう。



受講生にあいさつする「Cafeハートフル・ポート」店主の五味さん（2月17日）

東京 コミュニティカフェ開設講座

最後に、1～3月に東京地区で「コミュニティカフェ開設講座」を全5回17時間、受講料1万5千円で行った。

徐々に参加者が増えた

第1回の参加者は5人しかいなかったが、講師からの紹介などで徐々に増え

結局、女性11人、男性6人の計17人が参加した。

引きこもり支援のNPO法人に勤める千葉県市川市の川田史郎さんは、同僚の川口克雄さんを誘って参加した。引きこもりの若者たちが働くパン屋をだれでも入れるカフェに変えようと、事業計画を立てた。終日いても邪魔にならず、ゆっくり過ごし、心理カウンセラーなどに悩みを聞いてもらえるようにしたいという。横浜市南区の地域ケアプラザで生活支援コーディネーターをしている半谷修さんは、地域でカフェを開きたいという住民の話があったとき、支援できるようにと受講した。山や谷が多い地域の谷の部分にある商店街で、店主やスタッフが専門知識や暮らしのコツを教える「まちゼミ」を行って、人が集まる場をつくれな

いかと考えた。

第1回講座

田代美香さんは、6年目を迎えた「メサ・グランデ」が食を通じた人と人との出合いの場、コミュニティビジネスとしてカフェを起業したい人を支援する施設として生まれたこと、最近では障害のある人向けの地域活動支援センターや子ども食堂の場にもなっていると話した。

午後は、各自、中心客層を設定し、どんな価値をどんな手段・仲間で提供するかを考え、開きたいカフェ案を発表した。このあと、武蔵新城にあるコミュニティ

スペース3カ所を希望者が見学した。

第2回講座

元気スタンド・ぶりズムを見学し、幸手団地集会所で終日、座学とワークショップを行った。内容は、千葉講座の第1回・第2回とほぼ同じ。

第3回講座

千葉講座の第5回とほぼ同じ。課外に、WACの近くにある「芝の家」を希望者が見学し、スタッフから話を聞いた。

第4回講座

カフェで出されているランチを摂ったあと、五味真紀さんが体験談を話した。義母を介護して看取った自宅1階の部屋を改装し、カフェを14年に開業した。音楽イベント、地元の人々が作ったクラフトの展示・販売、子ども食堂、認知症カフェなどへと事業が広がってきたと説明。そして、「カフェを開く夢を実現するために、やりたいことや自分の地域資源を書き出し、それを人に言ってみよう」と呼びかけた。

講座の終了後に、希望者は近くにある「希望カフェ」と、15年度の受講生、野間康彰さんの会社が大和市に開いた「あかり食堂」を見学した。

第5回講座

千葉講座の第7回とほぼ同じ。



Community
Cafe

全国交流会

開設講座成果発表

最近の受講生が開設プランを、 実践者が現状や苦労話などを披露



WACは3月31日(土曜日)に東京都千代田区飯田橋の「東京しごとセンター」地下2階講堂で「第8回コミュニティカフェ全国交流会・開設講座成果発表会」を開いた。

3月31日に開催 146人が参加

- 開設講座の成果「マイカフェ・プラン」を発表
- 全員参加で18のグループ討論も

全国交流会の第1部では、東京と千葉のコミュニティカフェ開設講座、認知症カフェ・ケアラーズカフェ開設講座の2017年度受講生たちの中から4人が、受講の成果として「私がつくるコミュニティカフェ・プラン」を146人の参加者の前で発表した。

15枚ほどのスライドを映しながら、カフェの名前から始まり、受講に至った動機やどのような姿のカフェにしたいか、そして収入と支出の一覧表などを丁寧に説明した。

「利用者に役立ちたい」「地域おこしにつなげたい」という熱い語りに、会場から拍手が続いた。引き続き、これまでにWACの開設講座を受講



浅川澄一さん



小泉圭司さん



堀内龍文さん



布川佐登美さん

し、その後、コミュニティカフェを実際に運営し始めた4人の実践者が現在の状況を話した。

当初の計画がその通り実現できたのか、あるいは大幅に変更を迫られた苦労話などを披露した。

いずれも、発表後に4人の講師者から質問やアドバイスを受けた。講師者は、「元氣スタンド・ぷりズム合同会社」代表の小泉圭司さん、「堀内会計事務所」代表の税理士・堀内龍文さん、「NPO法人ケアラーネットみちくさ」理事長の布川左登美さん、福祉ジャーナリストの浅川澄一さん。

第2部では、全参加者が18のグループに分かれて、コミュニティカフェや関連テーマについて話し合った。

東京講座の受講生
松田美由紀さん
(川崎市高津区)



子供向けパソコン教室

「どんな人も成長過程にあると思います。私は、人の潜在的な可能性を見出すのが得意だと自己診断しています。そこで、パソコンを使って子供たちにさまざまなプログラムを提供していきたいと思っ

松田美由紀さんは、大手IT企業のシステムエンジニア。子育てをしながら会社勤めをしている。厳しい日々を追われている時に「救ってくれたのが地域のママさんたちでした。公園やランチ、飲み会などに誘ってもらい一息つけた」。

そんな体験から、ボランティア活動で仕事の技術を活かせないかと考えたのが子供向けのプログラミング教室である。名付けて「キミの秘密基地」(Catch the

3. きっかけ 2/2

- ① 高価な高級プログラミング教室が多数開校 (大手IT企業も参入)
- ② テキスト + 講義受講 or 少人数個別指導 がほとんど

教育費格差 → 経験格差 → 就職格差 → 貧困格差
この連鎖を止められないだろうか

人から教わる教育ではなく、創造力や論理思考力を鍛え、社会で生き抜いていくために必要な力を一緒に経験できる場が作れないだろうか

4. やりたいこと

A. 子どもの意欲と自ら考え・行動する力を育む学び場づくり
B. 保護者の育児・教育サポート
C. 新しいスタイルの学習環境を提供
D. 地域の多世代交流推進

8. 店内イメージ&チラシ

「周りのプログラミング教室を見ると、高額で少人数個別指導が多く、生徒が受け身になりがちです。私は、新しいスタイルの学童保育にしたい。月会費でなく、1回からでも利用できる。一緒に挑戦する仲間がいて、応援してくれる大人がいるような場所にしたい」

講師者の小泉さんは「学習格差の解消を目指す」という発想はとてもいいと思います。弁当など食事は誰が作るのかなど教室の他の事業にはもう少し詰めが必要かと思っています」。

サブキャッチとして「ひとりじゃない。大きな波も怖くない！一緒にやってみよう」と謳い、参加者に呼びかける。

東京講座の受講生
かおる
小田原 郁さん
(千葉県流山市)



ママと子供の「コミカフェ」

2017年7月まで夫の海外赴任で上海に滞在していた。今は在宅ワークで働 きながら、2歳8カ月の娘を育てている 小田原さん。

「フリーの在宅勤務者は認可保育園のハ ードルは高く、民間託児事業者は高額で、ともに日常的に頼ることはできません」

とまず苦しい立場を訴える。

自宅近くで子どもと一緒に過ごせる所 もなかなか見つからない。公園には遊具 がなく、ファミレスでは子どもの滞在は 1時間が限界、カフェでは騒ぐ子どもは 居られない。「居場所がないのです」。

そこで、親の居場所(カフェ)と子供 が勝手に遊べる場所を「くつつけてしま えばいい」と思いつき、「コミュニティカ

くつつけちゃおう

キッズスペース × 親の居場所(カフェ)

シンプルな答えなのに、存在しない場所。

プラスアルファの付加価値②
子供関連用品を販売

- ブランド名: putiNATV+プチナツフ
- ネットショップ: Yakool、楽天、メルカリ
- 子供靴下、ボシエット、靴
- 20種類以上品揃え

【まとめ】コンセプト

- コンセプト: 子供が(勝手に)遊んで、親の居場所がある空間
- ターゲット: 新卒ママ~1子の未就学児を持つママ
- 提供する機能:
 - ①: 子供が遊ぶ場所
 - ②: 大人が居心地場所
 - ③: コミュニティづくり
 - ④: 楽しいお買い物

フェを提案した。

「子供を放して、親がのんびりできる居場所」というのが、小田原さんが定義する「コミカフェ」だ。「児童館プラス親の寛ぎスペース」である。

この目的に特化するため「食事はきっぱり諦める」。ただ、収支を考えると、プラスアルファの付加価値が必要なので、子供向けの靴下やボシエット、雑貨を販売すると言う。現在、つくばエクスプレスの沿線で開催地を探している。

講師者の堀内さんは「カフェとはいえ、飲食がなくてもいい。居場所作りに徹するのは評価したい。また、非営利活動とは言っても、収入を確保するのは当然で、輸入靴下の販売はとってもいいアイデアだと思っ」とアドバイスした。

2017年度の講座受講生の発表

「母が数年前までお茶を教えていた茶室を認知症カフェにしては」と考えた。そうすれば「人が集まってきて、父も話し相手ができると思う」。

羽生市にも認知症カフェはあるが、



認知症カフェ・ケアラズカフェ
講座の受講生

柿沼 靖さん
(埼玉県さいたま市)

茶室を認知症カフェに

両親が住んでいる埼玉県羽生市の実家の茶室を使って認知症カフェを作ろうとしているのが柿沼さん。多世代型認知症茶寮「游庵」と名付けた。

母親は要介護3で認知症が進んでいて、食事や入浴、トイレ、着替えなどが1人ではできない。そのため父親が母を介護していて「老人会長を辞め、趣味も諦め、旅行にも行けず、近所づきあいをする余裕もない。精神的に煮詰まっている」と話す。老々介護の典型のようだ。



介護をする家族は茶室で、認知症ご本人はボランティアとリビングで過ごします。



自宅から遠く、3カ月に1回しか開かれていない。「近所には介護家族が悩みを共有できる場がありません」と柿沼さんは強調する。

ただ課題があると言う。柿沼さんは東京・六本木に通勤して自宅はさいたま市にあり、両親の家まではかなり遠いこと。「ボランティアとして手助けしてくれる私の知人や仲間は東京や千葉にいて、なかなか羽生市までは行くのは難しい」。つい1週間前の3月25日に第1回のカフェを開催した。8人の参加者に6人のスタッフで対応した。

講師者の浅川さんは「お母さんのなじみの場所を活用するのは、認知症ケアとしてとてもいいことだと思う。特に、教えていた場所なので、ご本人には前向きになれる良い環境です」と話した。

千葉講座の受講生

福原雅代さん
(千葉県鋸南町)



知人の家をカフェに

ケアマネジャーとして関わってきた一人暮らしで89歳の幸さんから「私の家を朽ちさせないで」と頼まれ、コミュニティカフェにしようと考えた福原さん。「誰でも寄れる 幸さん家」である。

幸さんとは、約40年前に老人家庭奉仕員として出会った。幸さんが父親の介護をしていて、「お父さんを看取る過程で信頼関係を育んできました」。

15年ほど前に、幸さん自身が要介護状態となった時に、「幸さんから指名されてケアマネジャーとして担当することにになりました」。最近、幸さんは入院後に施設へ入所した。

その幸さんから「地域の人に役立つように家を使ってもらいたい。民宿を苦勞



こんな事をこの場所でやれたらいいな・・・

おいしく楽しく食べて笑顔になるコツ

- ・お茶
- ・食事
- ・綿菓の販売
- ・作り方のアドバイス



実際の運営は平成31年より

- それまでに行うこと
 - ・中核メンバーとの十分な話し合い
 - ・実質の運営内容の協議

皆さんを生活かしてやりたいこと

- 自然な介護予防
 - ・ウォーキングのすすめ
 - ・実際の使用と桜並木(保田川)の散歩



地域を互いに助け合える活動

- 高齢者の働く場、小さな生活支援、便利屋さん

楽しいことの実行

- ・歌声カフェ、各種趣味講座、手芸作品販売
- ・手作りおやつ販売、子供の遊び場作り

しながら営んできた愛着もあり、私も施設から時には家に帰ってみたい。これまで地域の人にいろいろ助けてもらったから、是非家を活用して欲しい」と言われた。昨年11月に、場所作りのメンバーと一緒に掃除をして、幸さんを迎えて誕生日会を開いた。この2月には、14人のメンバーが集まり、今後の利用法を話し合った。

これから、どのようなことが出来るかいろいろ考えている。「柱時計がポーンポーンと鳴るような、のんびりゆっくり長話が出来る空間にしたい。お茶や食事があって、総菜の販売もしながら来た人が笑顔になれるようなところがいいです」。来年から本格的に運営する予定だ。「保田川の桜並木の散歩で自然な介護予防をしたり、高齢者の働く場にもしたい」と話す。

講師者の布川さんは「部屋数がとても多い大きな家なのでいろいろ出ることが出来るですね。行政や社協との連携がとれているのもいいことだと思います」と話した。

2012年度中野講座の受講生

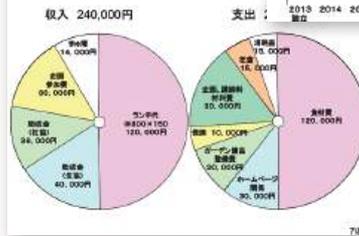
桑田厚子さん
(東京都府中市)



7. 利用状況



8. 2017年度収支状況



自宅の庭をガーデンカフェに

専業主婦の桑田さんは、自宅の庭を「コミュニティガーデンカフェ・きゅ庵」として、年間20回前後開放している。

高齢者や障害者、赤ちゃん連れのお母さんたちに「周囲を気にせずに緑の中でゆっくりできる場所を提供したい」という思いから始めた。季節の花や緑を楽しんでもらいながらイベントも催す。

春3月、杏のお花見を兼ねてまずプレオープン。6月に梅や杏のもぎとり会、そして夏はバーベキュー、秋は柚子のもぎ取り会などと続く。庭にいくつかのテーブルが出ることも。花を使ったフラワーアレンジメントの講習も開く。来場者には予約してもらい、ランチ代は800円。

2014年から始めており、多い年で23日間開いて180人が利用した。収入の半分はランチ代で、あとは生協と社協からの助成金などだ。年間収入は24万円で、桑田さんの持ち出しは1万4000円にとどまっている。

「無理しないで、自分ができる範囲で趣味を生かしながら運営しています。しかも、お金をかけないで、自分も楽しみなながらがモットーです」と桑田さん。「そうすれば長続きできるのではないのでしょうか」。

講評者の堀内さんは「素晴らしい内容だと思います。ご自身の持ち出しを最小限に抑えてご自身も十分楽しんでるようがいいですね」と話し、小泉さんは「おもてなし系で、「コミュニティデザイナー」の役割も果たされている」と評価した。

2014年度千葉講座の受講生

小倉光枝さん
(千葉県市川市)



「コミュニティ・カフェまいんど」を開設

「かつて住んでいた自宅で居場所作りをしたい」と十数年前から考えていた小倉さん。というのも、ボランティアで高齢者からの電話相談を受けていた時に「誰とも話さない人がいる」「人と話したがっている人が多い」ことに驚いたからだ。7、8年も相談を続けていた。

2014年9月11日にWACのコミュニティカフェ開設講座に参加し、翌年5月に食品衛生責任者の資格を取得、10月には家を改装し保健所の営業許可も得る。そして12月に、千葉県市川市曾谷で友人たちの協力を得て開設した。週1回月曜日の午前10時から午後3時まで開いている。コーヒーと紅茶のほか、

2015年12月 オープン

- どんなカフェを
1. 週1回月曜日10時～15時
- 2. そこへ行けば誰かと話ができる。
- 3. ランチとコーヒー・紅茶を提供
- 4. フラダンスなど楽しめる講座の参加費を運営費に
- 5. 手伝ってもらう人はボランティア



500円のランチを提供。第1週と第3週の午前には友人が講師となってフラダンスの教室を開き、第2週の午後はネットクレス作りの教室も。

ウクレレの伴奏でアロハオエを歌う七夕の会やフラダンスが登場するクリスマス会などを仲間と共に楽しんでいる。小倉さんは「多くの人に協力して頂き、私の思いに近いカフェができたと思っ。お客様にもボランティアにも喜ばれています」と振り返る。

これからの目標は、「木曜の午後も開いて週2回開催とすること、イベントの回数を増やし固定客をつかむこと。それに、来客が中高年の女性に偏っているので、男性も含めて幅広い年齢層に来てもらえるようにしたい」と話す。



Community Cafe

全国交流会
グループ討論

18のテーマで全員が参加 議論は盛り上がり、 得るものが多かった

開設講座の受講生とカフェ開設者による発表の後、第2部では参加者全員が話し合うグループ討論に入った。グループは「認知症カフェ」「ケアラーズカフェ」「地域包括ケア」「子育て応援」「子ども食堂」など「コミュニティカフェ」に関わる18のテーマに分かれた。
第1部の4人の講師を含め、それぞれカフェの実践者たちが話し合いの進行役となった。議論は盛り上がり、1時間半はあっという間に過ぎたようだ。



グループ	テーマ	担当者 (カフェ名・所属・職業等・敬称略)
1	当事者も働く認知症カフェ	形山昌樹 (すもも Cafe)
2	認知症・ケアラーズカフェ	布川佐登美 (ケアラーズ&オレンジカフェみちくさ亭)
3	自宅カフェ&ケアラーズカフェ	岩瀬はるみ (きままなスイーツカフェ、ケアラーズカフェ KIMAMA)
4	地域の支えあい拠点としてのコミカフェ	小泉圭司 (元気スタンド・ぶりズム)
5	地域包括ケア	浅川澄一 (福祉ジャーナリスト)
6	福祉制度の枠を越えた交流の場所	岩永敏朗 (いのちの木)
7	高齢者を囲む多世代が集う居場所	福谷章子 (すいようカフェ)
8	子育て応援カフェ	栗澤稚富美 (子育てカフェモグモグ)
9	カフェと子育て世代の社会参加	森 祐美子 (こまちカフェ)
10	子ども食堂と学習支援	大村みさ子 (子ども村：中高生ホットステーション)
11	まちに開かれたシェアハウス	川西 諭 (みかんハウス)
12	住み開きカフェ	五味真紀 (Cafe ハートフル・ポート)
13	クラフトビールが飲める居場所	富木 毅 (幕張ブルワリー)
14	コミレスで地域課題解決	新井純子 (ハルシーカフェのら)
15	コミカフェの価値	米田佐知子 (コミュニティカフェ Fun)
16	活動の仲間づくり	青柳彰一 (共奏キッチン)
17	コミカフェの経営面	堀内龍文 (税理士)
18	安心できる居場所とは？	横田明菜 (アルコイリスカフェ)

終了後に書き込んでもらったアンケートを繰りながら、グループ討論の成果を追うと――。

「認知症の当事者が一緒に働くという運営者の視点は新鮮だった」(30歳代の福祉団体職員)、「地域を巻き込んでいく方法にいろいろな手段があると思いました」(都内から来た訪問看護師)。2人とも「当事者も働く認知症カフェ」のグループに参加した人の感想だ。

認知症カフェをテーマにしたグループは3つ。いずれもカフェの運営者とその実情を披露しながら議論の進行役をつとめた。コミュニティカフェを運営していく中で、参加者の悩みを聞いて認知症ケアの必要性を感じたようだ。

「当事者の会や家族の会を開く際のコツを聞くことができた」(生活支援コーディネーターの40歳代の女性)、「自宅を開放した現場がよく分かり勉強になった」(千葉県流山市から来た40歳代の保健師)という書き込みもあった。

「高齢者を囲む多世代が集う居場所」のグループ

に参加した40歳代の市役所職員は、「運営する場所が大事だとつくづく感じました」と感想を寄せた。

「子ども食堂と学習支援」のグループの参加者で「子どもたちの情報をどのようにしたら得られるかということをとをたくさん知ることができ、ありがたかったです」と述べているのは、都内から来た女性。

また、シェアハウスについて議論したグループからは「シェアハウスのキッチンスペースの利用方法などがよく分かりました」(都内から来た50歳代のパートで働く女性)とあった。

「住み開きカフェ」のグループを担当したのは、「ハートフル・ポート」の五味真紀さん。そのグループに加わった50歳代の女性は「五味さんの話を聞いて、自分の思いを発信することの大切さを知りました。カフェづくりに取り組む姿勢にも勇気づけられました」と記入。グループ討論から得るものが多かったことがうかがえる。

求人は3790人、求職者は1827人、就職者は203人

みなと*しごと55(無料職業紹介事業)

アクティブシニア就業支援センター「みなと*しごと55」は、おおむね55歳以上の求職者を対象とした無料職業紹介事業や就業促進事業を行う、多様な働き方を支援する「就業支援窓口」です。

これまでの職業経験や経歴、希望に応じた仕事探しのアドバイスをする就業相談(キャリアカウンセリング)を行っていません。少子高齢化により大きなボリュームのある高齢層が既にセカンドライフの段階に入ってきています。

今後、65歳以降においても、働く意欲のある高齢層が、年齢にかかわらずその能力や経験を生かして生涯現役で活躍し続けられる社会環境を整えていく必要があります。

「みなと*しごと55」は、以上のような状況の中で、一人ひとりの経験や技術、能力、希望に添うよう、きめ細かな相談や情報提供を行いつつ、具体的な就業への道を切り開いていきます。

「新しい自分探し」とアドバイス

求職者に対して東京都港区の特色を生かしつつ、求職者が安心して相談・登録に訪れることができる環境をつくり、センター自体が魅力的な場所となるよう心が



再就職支援セミナー、2017年6月



所長が求職者と面談(東京都港区提供写真)



合同就職面接会、18年1月

けます。

相談業務においては、専門のカウンセラー(及びそれに準ずる能力を有する者)が対応し、求職者自身の働き方・職業の選択などについて幅広く考えられるようアドバイスします。

その際、求職相談者に対しては、かつてのキャリアや待遇等にこだわるのではなく、新しい自分探しをしなければならぬこと、地域で暮らす一市民としての生活を考える必要があること、求人状況

等に合わせて自分の仕事探しをする必要があることなどを伝え、サポートしていきます。

企業など求人先に対しては、直接訪問して人事担当者と話をする中で求人登録を促し、55歳以上でも社会経験が豊かで新しい分野の仕事でも十分にやる気のある求職者がいることをアピールしていきます。

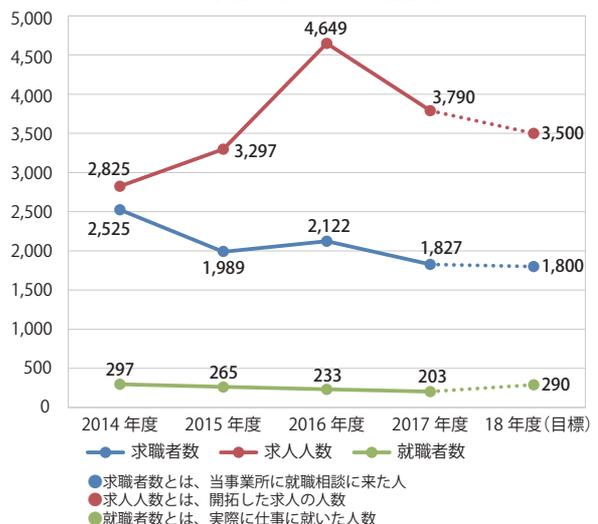
2017年度の実績

2017年度は3790人分の求人に対して、求職者数は1827人でした。

実際に就職が決まったのは203人となりました。求職者は2014年度の2525人をピークに多少、減っています。企業の定年の延長、再雇用などが定着しつつあり、減少したものと思われま

す。そんな中、企業の景気

2014~2017年度実績 (+18年度目標)



は上向きであり、全体的には人手不足が深刻で、求人人数は高い数値を保っています。就職者数は横ばいですが、マッチング率を高め、2018年度は40%アップを目指したいと思います。

WAC会員も協力

「みなと*しごと55」では、50歳以上の方の求人情報、仕事を探している方の登録を随時、募集しております。皆様のお知り合いなどで求人を出される方、仕事を探している方などいましたら、ぜひ、ご紹介いただきたいと思います。

「みなと*しごと55」の連絡先は、
☎03-52322-0255

(所長/小野澤誠)

介護人材マッチング・定着支援事業 受講生は55人に

川崎市からの委託事業

「川崎市介護人材マッチング・定着支援事業」が3月末に無事に終了しました。

この事業は、①求職者への介護職員初任者研修を実施し、川崎市内の介護保険サービス事業所への就労を目的に紹介すること ②事業所の職員に、採用力や新育成力向上、職員の定着を図るためのインストラクター研修を行うこと——です。

求職者の受講期間は約6カ月です。前半の3カ月は座学による研修、他の求職者との交流研修や就職相談会。後半は研修と並行して、OJT研修（求職者の受け入れ）に入ります。

就職先では特養が最多に

4回のコースの全受講生は55人でした。その就職先を見ると、特別養護老人ホーム（特養）が13人で最も多く、次いで、認知症グループホームが10人、デイサービスの9人と続きます（表参照）。

介護職員不足が全国的に広がっているなか、こうした事業で人材を送り込むことができたのは、とても良かったと思います。求職者も半年近い研修を受けて就職でき、マッチング事業として良い結果を出



「介護職のセルフケア体操」をテーマに中本拓海先生による研修



「介護技術振り返り研修」をテーマに長瀬紀子先生による研修

すことができました。

当初は年3回のコースを組んでおりましたが、10月の段階で目標の就職者数に若干到達しないようなので、1月から2月にかけて4回目の研修を行いました。この4回目の受講生は、初任者研修とほぼ同時に就職活動に入り、研修修了前後から働き始めました。

1年間の研修を通じて、「介護職に興味がある」「働いてみたい」と思っている方が意外に多いと感じました。参加者の動機は様々です。介護職として働く意欲が

高い人、チラシがポストにあつたのを運命的に感じた人、無料で資格が取得できるかな、と思ってきた人などです。年齢は10歳代から70歳代と幅広かったです。

高効果のポスティング募集

苦勞したのは、参加者をどのようにして集めるかでした。求人広告紙や川崎市の広報誌などにも掲載しましたが、最も効果があつたのは、ポスティングです。市



受講生募集チラシ

●受講生の就職先一覧

	特別養護老人ホーム	介護老人保健施設	グループホーム	有料老人ホーム	小規模多機能	デイサービス	デイケア	訪問介護	未就職	合計
1期生	3	2	4			4			2	15
2期生	5	2	3			3		2	2	17
3期生	2	2	2		1	2	1	3		13
4期生	3	2	1	2				2		10
合計	13	8	10	2	1	9	1	7	4	55

(単位：人)

内全域の集合住宅を対象にしました。就職先の介護事業所には、研修を終えた受講生と分かち合っていて、安心して受け入れてもらえました。受講生の住まいと勤務地が少し離れていたりと、紹介した事業所ではなく、受講生が自分で見つけた介護事業所への就職もあつたりして、参加したすべての介護事業所に紹介することはできませんでした。

WACは2009年度から13年度まで基金訓練、求職者支援訓練における介護職への就労支援事業を行ってきました。また、55歳以上の方を対象にした「みなと＊しごと55」もあります。このような就労支援の経験を生かして、1年間事業に打ち込んできました。

(研修・教育事業担当常務理事／平野陽子)

過去最多の54件の評価を実施

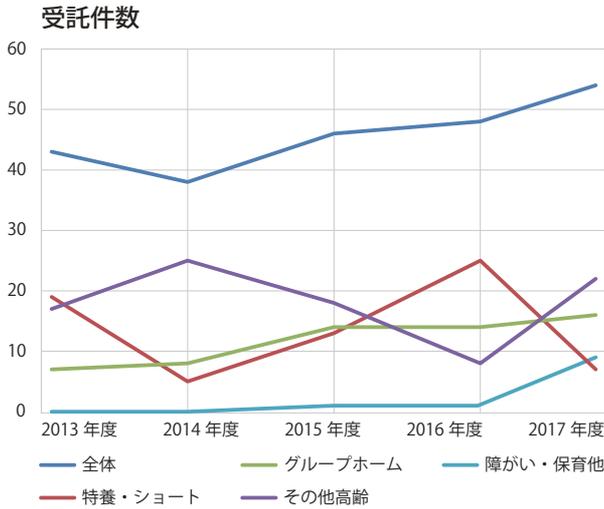
福祉サービスの第三者評価事業

2017年度は、これまでで最も多い54件の評価を実施しました。新しいサービス分野の評価も行い、WACの評価実績の幅が広がり、大きな成果が得られました。過去の評価実績推移を見ると、高齢者分野の比率が高く、障がい・保育分野の実績は少なかつたのですが、17年度は障がい分野が増え、保育分野にも1件取り組むことができました。

現在、私たちは中長期計画を立てており、18年度はその2年目になります。

また、18年度は東京都の評価項目が制度始まって以来、初めて大幅に改定されます。これらを踏まえ、事業基盤の確立、より質の高い評価力の構築に向けて、評価者の皆様、事務局一体となって進めていきたいと考えています。

(第三者評価事業担当/藤井紘一郎)



WAC 第三者評価評価者の声

早福千鶴さん

(高齢社会の住まいづくりを調査・研究する「コ・アビタ」を主宰)

言葉で意思表示できない人に代わって

福祉サービス第三者評価は、利用者本位の福祉の実現を目指して創設された制度で、利用者でも事業者でもない第三者の評価機関が、専門的・客観的な立場から、「組織マネジメント」と「サービスの内容や質」を評価します。



北昌司さん

(社会福祉士、介護支援専門員、精神保健福祉士、調理師)

理念の実現を目指しているかを判断

私が東京都福祉サービス第三者評価の評価者になったのは、制度がスタートした2003年の翌年です。主に高齢福祉・障害福祉分野の評価を行い、これまで100件余の事業所を訪問、評価してきました。

第三者評価は「組織マネジメント」と「サービス提供のプロセス」について評価します。まず「事業所の目指していることの実



現に向けて一丸となっているか」を問います。「目指していること」とは

「理念・基本方針」です。例えば、高齢福祉サービスでは、どの事業所も主に介護保険制度によって一律に定められた要件、報酬単価などで運営されていますが、現場では様々な独自の取り組みが見られます。

近年、福祉の現場も人手不足の状況です。「理念実現」には職員の力がなによりも大切との信念を持って、人材育成に力を入れている事業所があります。働きやすい職場づくりをし、仕事のやる気と成果を反映する賃金体系にするなど、経営層の信念・

できない人々の観察、また、事業所の経営層・リーダー・一般職員それぞれの立場の意見を具体的に知ることでできます。

これをどのように報告書に生かすのか大きな課題です。限られた時間のため何回経験しても難しく、悩ましいものです。事業所の気づきやサービスの質の向上に寄与できるように講評を書くこと、同時に、利用者希望者やその家族のために分かりやすい文章を書くことに留意しています。今後は評価の視点を広げるため、高齢者分野だけでなく、障がい分野や子ども分野にも取り組みたいと考えています。

奮闘ぶりが見えてきます。「理念」を事業の根本にすることが大切と痛感しています。

WACの第三者評価の進め方では、二つの評価者会議を行います。ひとつは、訪問調査の前に行い、複数の評価者が利用者調査、職員・経営層の自己評価結果などを分析して、事業所の特徴や課題を共有化して訪問調査に臨みます。

訪問調査後の会議では、評価者が分担して作成した評価文の推敲、良い点・改善点の絞り込みなど質の高い報告書作成に向けて熱心な議論が行われます。ここがWACの「えらい」ところだと思っています。

2017年度を振り返る

千葉県福祉ふれあいプラザ(ふれプラ)

この4月9日、年1回のふれプラ職員が集まる全体会合を開きました。千葉県高齢者福祉課から2人、共同事業体の代表団体・WACの升田忠昭理事長、構成団体・ACOB Aの木川敏子代表理事を含めて37人が出席し、各部署から前年度の報告と新年度の事業計画を中心に発表を行いました。

その内容を基に、「介護実習センター」をはじめ「介護予防トレーニングセンター」「ふれあいホール」の順に2017年度の事業を報告します。

3年連続で20万人超の利用者

一年間の総利用者数は3年連続の20万人以上となり、開設以来の累計利用者数は200万人を超えました。事業収入は、千葉県からの指定管理料と利用料収入を合わせて1億1600万円となりました。

利用料収入の7割弱が部屋貸しの「貸し館」によるもので、貸し館は千葉県の予約システムを利用して管理しています。

支出は1億1500万円弱でした。その内訳は人件費が7割を占めますが、膨大な数の設備・備品の保守・修繕費が近年増加しています。

年間開館日数308日、午前8時半から午後9時半までを職員約50人で担って

います。職員の数も国家資格等を持つ専門職です。

「介護実習センター」で認知症予防セミナー

「介護実習センター」の役割は、高齢者福祉のために介護という知識と技術を広く県民に提供することにあります。県民研修で学習の機会を、介護等の各種相談で個別性に合わせた情報提供を、地域の茶の間等で直接的なサービス提供を行っています。

職員数は他部署兼任者を入れて11人。県民研修は年間119回行い、参加者は4549人でした。うち36回は出張し、市町村や地域包括支援センターと連携しています。

市町村や地域包括支援センターの職員対象の介護予防担当者研修では、実技講習を組み込んでいます。実際に指導の場に立つことのない職員にも知ってほしい知識と時代の変化を取り入れていきます。

千葉県には54の市町村があり、地域性に大きな違いがあります。ふれプラは県の施設ですから市町村支援が課せられています。とは言え、市町村支援は難しい課題ですから、市町村の実情を理解して



消防署を呼んで、救命講習を行った。



「地域の茶の間」でマジックを披露する職員

市町村の要望を引き出すことができたと考えています。

地域等との連携で、17年度最大の新事業は国際医療福祉大学成田看護学部からの実習生受け入れでした。年度初めから大学側とミーティングを重ねて実習内容を具体化し、9月から12月にかけて69人の学生を迎えることができました。

大きな啓発イベントとして、8月に「まだ間に合う！今日から始める認知症予防」を行って、参加者は400人を超えました。アンケートの回答者は300人になり、自由記述に100人以上が感想を寄せ、認知症への熱心な姿勢と切実な願いを知ることになりました。

もう一つは、毎年2000人以上が参加する11月の「千葉県福祉機器展」です。17年度の特徴は、地元の高校生や専門学校の学生がボランティアとして多く入ったこと、国の「認知症介護研究・研修東京センター」の永田久美子・研究部長による講演内容をホームページで発信したことです。

「地域の茶の間」は3種類、月に約5回

開いて年間で500人近くが集いました。

登録者が1000人超の「介護予防トレーニングセンター」

「介護予防トレーニングセンター」は、介護予防が目的の施設です。職員数は20人。5年前に登録者数が1000人を超えてから満員の時間帯が増え、ほどなく年間利用者数が4万人超となりました。

同時に、待ち時間が長くなり、利用者間のトラブルも目立ってきました。マシンの取り合いや口論なども珍しくありません。近年、サービス産業で問題となっている暴言や威圧的態度をとる利用者への対応は簡単ではありません。

利用者との会話は介護予防トレーニングの二環ですから、職員にはコミュニケーション技術の高いスキルが求められます。

しかも、複数の利用者に同時に対応するという場面が通常です。このようなスキルは一朝一夕にできるわけではないため、ミーティング等で事例検討して共有していきます。

高齢者の運動において注意すべき点は多々ありますが、運動中の急変を知らせる血圧・心拍数の変動は要注意です。軽い会話をしながらの運動は、オーバートレーニングを防ぐために良いとされています。

会話の中から問診票等ではわからない

重要なサインを引き出すこともできます。認知機能の低下や難聴など、高齢者の特性による伝わりにくさもあります。

個別指導相談を予約制で

今年、利用者からの個人指導の要望にこたえるため、「個別指導相談」を予約制で行いました。年齢や既往症で括れない個人差も高齢者の特性の一つです。体力測定をして個々にトレーニングメニューを提供していますが、実行するためには支援が必要で。

介護保険の「総合事業」に住民主体の介護予防運動教室が位置づけられていますが、グループレッスンで個別性に配慮するには相当な高い運動指導技術が必要で、なければ効果が少ない、または悪化させる運動となってしまう。

指導方法や良いとされる知識は進化しており、常に提供する情報を変換させることが求められています。

年間利用12万人超の「ふれあいホール」

ふれプラは共同事業体で運営しており、「ふれあいホール」は構成団体である地元のNPO法人ACOBが主体となつて運営しています。

といつても事業は共同事業体運営委員会が協議して千葉県と相談しながら行っているため、WACも関係がないわけではありません。特に、ホールは定員550人に高額の設備を備えるため、安

全管理の責任はとても重くなります。特殊性があるため、公益社団法人全国公立文化施設協会に人会して、知識・事故事例などの情報をもらっています。

ホールの主な役割は貸し館です。ホールは文化利用とスポーツ利用の多目的ホールで、ホール横に開放型ギャラリーが設置されています。職員数は14人です。

ホールの利用率は12年間100%、年間利用者数は12万人を超えます。災害時は一時滞留施設に指定される施設です。

利用者と一緒に防災訓練

東日本大震災の時、施設のある我孫子市は震度5弱で、地盤の弱いところを中心に約230棟が全半壊しました。

ふれプラでは、ホールで高校生が卒業記念コンサートのリハーサル中でした。観客が不在だったため混乱もなく避難誘導できましたが、天井から小さなビス等がバラバラと落下しました。

防災訓練は年2回、けやきプラザの人居施設全体で行いますが、3月に初めて利用者を入れた自主防災訓練を実施しました。トレーニングセンターの自主事業と合体させて「ハッピースマイル・エクササイズ&ミニ防災訓練」として行いました。利用者を入れた訓練は計画時から細心の注意を払わなくてはならず、訓練時大変

な緊張感を味わいました。

2回のトラブルを教訓に

ホールでは震災以外に大きなトラブルが2回ありました。1回は爆破予告で、この時は全館避難でしたが、時間が設定されていたため計画的に動くことができました。

もう1回は、舞台幕が焦げるぼや騒ぎです。照明器具に舞台袖の幕が接触し、公演終了直前に焦げ臭が漂いました。煙も出ず、混乱はなく避難誘導も行わなかったのですが、その後の主催者側との交渉を含めて多くを学ぶ事故でした。

自ら経験した事故等に対処するのは当然ですが、未然に防ぐことの方がよいです。ヒヤリ・ハット集を毎年出していたのは予防のためです。しかし、例年通りとなると緩むもので、そこでヒヤリ・ハット集を

全面改訂しました。良い出来で、有識者による県運営委員会でも賞賛されました。

18年度は指定管理事業の最終年

2006年度から指定管理を始めて、18年度は13年目です。今年度は今期の指定管理の最終年度であり、新しい指定管理の申請年度でもあります。

千葉県福祉ふれあいプラザは公の施設です。公の施設とは、住民の福祉の増進を目的に地方公共団体が設置した施設のことです。指定管理者制度は、その設置目的の遂行において民間の活力を生かしたサービスの向上と経費節減を目的に導入された制度です。

目的と立地する地域の特性を考慮して、より良い運営に向けて努力したいと思っています。

(統括責任者・常務理事/小林里美)

● 2017年度の主な行事・実績一覧

4月	全体会合(ふれプラ職員総会)41人出席 介護予防トレーニングセンター4月期登録258人、 総登録者996人
5月	第1回備品安全管理委員会、緊急伝達訓練
6月	介護予防講習「ピンピンキラリ初歩麻雀」40人で開始(終了3月)
7月	トレーニングセンター7月期登録234人、総登録者1,003人 介護予防イベント「ハッピースマイル・エクササイズ」115人参加 サマーコンサート「大草原の輝き(モンゴル友好)」513人参加
8月	認知症啓発イベント「今日から始める認知症予防」436人参加 保健所定例立ち入り調査・レジオネラ菌等検査、問題なし
9月	国際医療福祉大学成田看護学部学生実習受け入れ開始(終了12月、69人)
10月	平成29年度利用者アンケート実施(登録団体800、登録個人1,003人) トレーニングセンター10月期登録257人、総登録者1,015人 職員研修「普通救命講習I」29人出席
11月	千葉県福祉機器展(2日間)2,088人参加
12月	認知症の人の家族の集い&我孫子市地域包括支援センター交流会27人参加
1月	袖ヶ浦市で4市合同県民研修「介護保険制度改正」228人参加 トレーニングセンター1月期登録262人、総登録者1,011人
2月	ヒヤリ・ハット集全面改訂、けやきプラザ防災訓練(避難所設置訓練) 市町村職員対象の介護予防担当者研修、今年度分終了。19市町から82人参加
3月	有識者による千葉県福祉ふれあいプラザ運営委員会 介護予防イベント「ハッピースマイル・エクササイズ&ミニ防災訓練」108人参加

担い手養成研修の修了生は217人に 府中市と八王子市などから委託

介護予防・日常生活支援総合事業

2015年度から始まった介護保険の「介護予防・日常生活支援総合事業」（新しい総合事業）。その訪問サービスの担い手をWACが養成しています。自治体や東京しごと財団からの委託事業です。

近隣住民の助け合い活動を広めるもので、WAC設立当初の「地域での助け合い活動」が制度化され、出番がやってくる

たと思います。

新しい総合事業は、介護保険の要支援認定者と、基本チェックリストにより生活機能の低下がみられ、要支援状態になる恐れがあると判定された人を対象にした市区町村の新しい地域支援事業です。

団塊世代がすべて75歳以上の後期高齢者になるのは2025年。介護保険の利益が急増することは間違いありませんが、財源とサービスの担い手不足は明らかです。そこで国は、軽度者はできるだけ自治体にサービス事業を振り替え、全国一律の介護保険制度では中重度者に絞り込もうとして総合事業を打ち出しました。

軽度者向けなので地域住民やボランティア、それも元氣な高齢者や専業主婦層などを担い手として想定しています。資格を持つプロでなく、普通の素人に広げようという作戦です。プロ集団の「まんじゅう型」から、裾野の広い「富士山型」への移行と厚労省は説明しています（図参照）。
介護サービスとしては、まず訪問介護と通所介護（デイサービス）に限定して自治体への移行が進んでいます。

厚労省が提案した総合事業の訪問サービスは5種類あります。①現行の事業に相当する訪問介護 ②人員等を緩和した

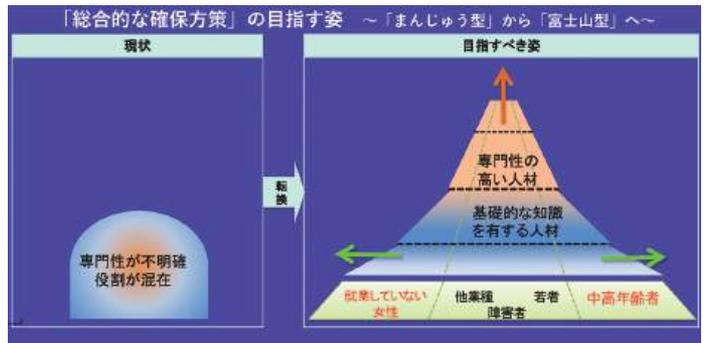
基準による「訪問型サービスA」 ③住民主体による「訪問型サービスB」 ④短期集中の「訪問型サービスC」 ⑤移動支援の「訪問型サービスD」です。

「訪問型サービスA」の担い手に

自治体はこれらのサービスのうち②から⑤について、自主的に基準を決めて取り組もうとしています。②の「訪問型サービスA」はほとんどの自治体が始めています。WACが2017年度に担い手の養成研修事業として委託された東京都の府中市と八王子市も、この「訪問型サービスA」の担い手のためのものです。

「訪問型サービスA」は、体に触れる入浴介助やトイレ介助などの身体介護は除き、掃除、洗濯、買い物などの生活援助に特化した内容です。府中市ではその担い手を「高齢者生活支援員」と名付け、八王子市は「生活支援ヘルパー」と命名しています（チラシ参照）。

研修では、活動の対象となる「要支援」の高齢者ほどのような状態の人たちなかのなかをはじめ、日常生活で何ができて何ができないか、あるいは認知症とはどのような



(出典：厚生労働省資料)

な人々たちのかなどを習得します。介護の基本を身につけてもらいます。
WACの高齢者疑似体験セットを使いながら、高齢者ならではの不便さや少しの工夫で暮らしやすくなることも学びます。
府中市では3日間で18時間、八王子市は2日間で12時間の研修をそれぞれ年間3回開きました。研修を受けた修了生は、3回合計で府中市が54人、八王子市は115人でした。このほか、東京しごと財団からの同様の委託事業で48人の修了生を送り出しました。合計で217人になります。

修了生たちは、「訪問型サービスA」を手掛けている介護事業所で働くことになりませんが、思い通りの活動ができるのか、なかなか難しいようです。

2018年度は、介護職の資格として、生活援助の新研修(生活援助従事者研修)や介護職員入門研修などが導入されます。WACは今年度も東京しごと財団と八王子市からの委託を受けて研修を行います。生活支援サービスに従事する修了生を多く輩出できるように、研修の内容を組み立てていきます。

高齢者生活支援員養成研修

府中市では、介護予防・日常生活支援総合事業(総合事業)が平成29年4月からスタートしました。これに伴い、高齢者の生活を支える「高齢者生活支援員」の養成研修を行います。訪問型サービスの担い手として、地域を支える多くの力を、今回広く募集いたします！

研修終了後、府中市の「高齢者生活支援員」として働き、高齢者の生活を支えます。研修期間中は、府中市の「高齢者生活支援員」として働き、高齢者の生活を支えます。研修期間中は、府中市の「高齢者生活支援員」として働き、高齢者の生活を支えます。

日 時：平成30年1月16日・23日・30日(火) 午前9時30分から午後4時30分まで

会 場：府中市役所北庁舎3階会議室(府中市道西2-24)

講 師：長寿社会文化協会職員ほか

対 象：研修終了後、高齢者生活支援員として就労できる市民

受講費：1,404円(予金500円)

定 員：30名(申込多数の場合は抽選)

締 切：平成29年12月25日(月)

お申込み・問い合わせ
府中市役所福祉保健課高齢者支援課介護予防生活支援担当
TEL：042-656-1117
※午前8時30分～午後5時(土・日・祝祭日を除く)

八王子市主催 受講者募集 受講料無料

生活支援ヘルパー研修

2日間の研修で、あなたも生活支援ヘルパー！

2/26(月)～2/27(火)

研修日時：平成30年2月26日(月)、27日(火) 午前9時30分～午後5時(休憩時間あり)

会 場：クレイトホール 111階 研修室

研修内容：八王子市内の介護事業所で、生活支援ヘルパーとして働きながら、2日間であなたも介護士として働き始める。

定 員：50名(申込多数の場合は抽選)

講 師：講師(予金500円)

申込締切：平成30年1月31日(水)

申込・問合せ：公益社団法人長寿社会文化協会
TEL：03-6405-1501(平日午前10時～午後5時)

都内の小学校で「つくし君」を装着 認知症疑似体験の問い合わせ相次ぐ

高齢者疑似体験

2017年度の高齢者疑似体験事業では、「うらしま」の研修は4月の杏林製菓の新人社員研修を皮切りに、年間で16回実施しました。うち7件が新規ユーザーで、うらしまを活用して高齢者マーケットを理解しようという積極的な企業との

多くの出会いがありました。まず本社でパイロット研修として体験してみ、その後各支店での研修導入を検討するところも数社あります。綿

密な打ち合わせをして要望を聞き取り、それぞれの会社のニーズに合わせた独自プログラムを準備して、丁寧な研修を行いました。

小学生909人がお年寄り体験

小学生向けの疑似体験、「つくし君」の研修は、東京都台東区からの委託で、区立の全19小学校のうち、富士小学校など16校の小学校で実施しました。体験者数は909人となりました。

18年度は、さらに研修を授業に取り入れる学校を増やし、17校の1033人で体験してもらう予定です。

小さいころから、お年寄りの体や心の状態を少しでも知っておくのは、とても良いことだと思います。子ども達の笑顔とやさしい気持ちを育む教育に、WACの「つくし君」が大きく貢献していると言っても過言ではないでしょう。

うらしま太郎やつくし君を活用したイベントの依頼は5件ありました。介護や住宅リフォームをテーマとした展示会形式のイベントに加え、企業内のノーマライゼーション向上のための社員向けイベントや、子どもを対象とした防災イベントの依頼を受けました。

高齢者だけでなく、さまざまなハンディキャップを持った方への対応を盛り込んだ車椅子体験やブラインド体験にも取り組みました。

インストラクターは65人誕生

高齢者疑似体験インストラクター研修は、WAC本部において3回、川崎市からの委託事業「介護人材マッチング・定着支援事業」でのフォローアップ研修で1回実施し、計65人のインストラクターが誕生しました。

また、販売に関しては、セット販売はうらしま16セット、つくし君11セットでした。部品の買い替え需要は高く、年度末の特別価格セールではたくさんの注文が



つくし君の説明に熱心に聞き入っています（富士小学校）

ありました。

認知症疑似体験については、年初より問い合わせが相次ぎうれしい悲鳴でした。研修は8件13回、イベントは5件対応し、販売でも3カ所に13台を納品しました。

認知症に関しては、高齢者の自動車運転事故のニュースや、地域での認知症サポートへの取り組みなど毎日のように話題を目にし、認知症への関心の高まりと相まって、疑似体験研修へのニーズが顕在化してきたと言えるでしょう。

この機をとらえ、認知症疑似体験のみならず、高齢者疑似体験事業も更に広めていけるよう、担当者一同、連携してしっかりと取り組んでいきます。

（研修・教育事業部主任／榊芳子）



名刺のやりとりや保険金請求書の記入などを体験しました（オリックス生命）



自社の菓のパッケージを開けて、使い勝手を体験しました（杏林製菓）

西大井いきいきセンターで蕎麦打ち 72人が参加した「男の手料理教室」

「食」で「介護予防」の委託事業

2017年度は「西大井いきいきセンターの食事提供」のほか、東京都品川区からの委託事業として「男の手料理教室」「外出習慣化事業・食事処」「わくわくクッキング」の3つの介護予防事業を実施しました。

いずれもWACポイントの「WACさしすせそ」が運営しています。

西大井いきいきセンターでは、2015年度から毎月3回、第2・第3・第4の金曜日に食堂で来館者向けに昼食を提供しています。「バラエティに富んだメニュー」と来館者大変好評を頂いております。

同センターは、社会福祉法人「こうほうえん」（本部・鳥取県米子市）が運営



する高齢者施設「ヘルスケアタウンにしおおい」内にある地域開放の場です。品川区は地域の高齢者の仲間づくりと健康づくりを目指す「シルバーセンター」を13カ所運営していますが、「西大

井いきいきセンター」はそのひとつとして位置付けられています。

WACは、こうほうえんからの委託で昼食作りをしています。

NPO法人「福祉振興会」（川崎市）代表の矢野邦一さんの協力で、第3週は蕎麦を30食限定で提供しています。矢野さんの弟子の方たちが、目の前で蕎麦打ちを上演するので見学者も来られます。

そこへ、こうほうえんから「来館者の方々から蕎麦打ちを体験したいという要望がある」という話がありました。介護予防講座の一環として毎年色々な講座を行う中、蕎麦打ちと介護予防講話をセットにした開催依頼でした。館内に募集ポスターを貼り出したところ、20人の参加

希望があり、2月19日に実施しました。当日は、各産地の粉の特徴や味、香りの違いなどを聞き、その日の温度や湿度で水分量を変えることや、こねる力の入れ方などを教えていただきました。

実際にこねてみると水が多かったり、水が二気に入って柔らか過ぎてまともならなかったりして大変でした。

伸ばしは、伸ばし棒で厚くもなく薄く



蕎麦打ち体験講座を始める前に話をする
矢野邦一さん（上）と美習風景

なく満遍なく同じ厚さにし、広げるようにと指導されました。切り終わると、太いところがあつたり、切れて短くなつたりと、茹でるまで一苦労でした。

自分で打った蕎麦を食べながら、「切る時の手加減が大変」「茹で時間が1分足らずで、こんなに美味しく食べることができたのは感激」「少々失敗したが、格段に美味しい」など楽しい会話がありました。

品川区から委託の「食」の3事業

このほかの3事業はいずれも品川区からの委託事業です。

「男の手料理教室」は、5月からと10月からの各10回、2期行い、合わせて72人が参加しました。任意参加の支援講座も全期で各教室2回ずつ行いました。

水曜日は狩野繭子先生に交代し、雰囲気もがらりと変わりました。木曜日はベテランの関本美貴先生で運営しました。レシピは東京ガスより提供していただき、



毎回分かりやすい内容となっております。

「外出習慣化事業・食事処」は、外出機会の少ない高齢者向けに品川区立大井林町高齢者住宅の1階で昼食を提供しています。

4月から9月までを1期として月1回第3火曜日に運営しました。参加者は11人でした。2期目は10月から3月まで、15人の参加となりました。品川区の消費者センターから講師を招いての講話や、日本歯科大学東京短期大学の教授を招いての口腔ケア等を実施しています。

「わくわくクッキング」は5〜7月、9〜11月、12〜3月に各10回開いた料理教室です。各回とも定員の16人が参加しました。支援講座も2回実施。介護予防事業として、緑・赤・黄・白・黒の5色の食材の栄養バランス、口腔ケア、認知症、介護予防ストレッチ、味覚体験などの教室があり、毎回好評を頂いております。
(WACさしすせそ代表/成塚江見子)



NPO法人尾瀬なでしこの会「WACCぐんま」(群馬県沼田市)

仲間づくりの「北毛カルチャースクール」 社会参加で健康寿命の延伸を

「WACCぐんま」の母体の「NPO法人尾瀬なでしこの会」は、2007年から「北毛カルチャースクール」を始めました。

団塊の世代の皆さんに、身体・認知機能が弱っても続けられる人生100年時代の自分の趣味や仲間づくりをしていただくことという狙いです。

北毛カルチャースクールでは、英語教室、まちづくり講座、健康ヨガ、認知症予防ゲームなど、趣味づくり、仲間づくりに役立つ講座を細々とですが続けています。プロから学び、また少人数で話し合う中で、自分の経



スリー A 方式認知症予防ゲーム

験と合わせて、深めていただくのが狙いです。

群馬県沼田市では、介護保険でフレイル予防を行っているテイスサービスは当会だけです。

身体の調子が悪くなってからの介護保険利用と考える人が多くて、自分のための学びを考えていない傾向にあります。

また、高齢者向けのサロンと云えば、体操教室が主流を占めています。介護予防に体操教室が有効であることはわかっていますが、実は継続的な運動と同じくらい、社会参加が健康寿命を延



風呂敷包み講座を、桐生市から講師を呼んで行いました。

伸ばせることもわかっています。

孤独は肥満より悪い

孤独は肥満よりも健康に悪いという言葉もあります。とにかく家に閉じこもらず、週に1回、1〜2時間程度なので、趣味の活動を始めることから、社会性を落とさない暮らしをしていただきたいと考えています。

北毛カルチャースクールの悩みは、何と言っても企画です。内閣府の調査で、「自分が高齢者だと感じるか?」という問いへの答えには驚かされます。

70〜74歳の年齢層で「自分は高齢者である」と「高齢者ではない」と答えた人が約半数ずつ。75歳〜79歳の層でも、「高齢者ではない」と答えた人が26%もいます。

自分のことを高齢者だと思っていない



筋力アップ教室

人が多いので、いわゆる高齢者向けの企画をしても参加者が集まりません。こうした中で、団塊の世代の特徴として、男性は社会貢献、女性は自分磨きで、男女ともに取り組んだ成果や効果が目に見えることが好みのようになります。

参加者同士で交流を

国民の6割が、住み慣れたところで最期を迎えたいと考えているそうです。それでは今住んでいるところは、住み慣れたところでしょうか。

北毛カルチャースクールは、元気な参加者同士が交流し、次はこういう企画をしてみたい、100歳までこういう暮らしがしてみたいという、参加者同士の情報交換の場でもあります。

沼田市周辺の方に、フレイル予防・介護予防の一貫として、北毛カルチャースクールに参加していただきたいと思えます。そして、自分に合った趣味と仲間とライフスタイルを早く見つけていただき、100歳まで暮らしたい夢や希望のあるまちにしていきたいでしょう。

今年度は女性交流会(65歳以上)で食事をしながら新しい企画にチャレンジする予定です。

(代表/後藤満里子)

NPO法人 あらた

(山形県酒田市)

障がい者が働くカフェを運営 山形県酒田市の市役所内で

山形県酒田市役所の1階のフリースペースに障がい者就労支援カフェ「えーる」が完成し、3月23日にオープンしました。市民が自由に使える憩いの空間です。お弁当、おこわ、サンドイッチとコーヒーを提供しています。営業時間は午前10時から午後2時。



来店客に「いらっしゃいませ。お水をどうぞ。何になさいますか」と声をかけ注文を取る。新築の市役所ですのでバリアフリーで、誰でも利用できます。



朝、あらたの本部の未来創造館で調理職員と一緒に弁当、おこわ、サンドイッチを作り、カフェに持っていきます。



店名である「えーる」は英語の「応援」とフランス語の「翼」をかけて、市民が応援することで障がい者が自らの翼で社会に参加していけるようにとの願いを込めました。

このカフェは、地方創生推進交付金を活用した「健やか酒田ヘルスケア推進事業」の一環で開設したものです。NPO法人あらたの「障がい者サポートセンターあらた」と社会福祉法人光風会の「障がい福祉サービス事業所たぶの木」の2事業所で構成する「就労支援カフェ運営協議会」が酒田市から運営を委託されました。2つの事業所が1日交代で開いています。

共に、就労継続支援B型事業の一環として、障がい者が働いています。「あらた」としては利用者様が働ける場を増やしたいと考えていたので、タイミングもよかった」と、障がい者サポートセンターあらた所長の村岡正喜さん。

参加しているあらたの障がい者の方は4人。1日に2人が通っていて、あらたの法人職員1人と一緒に接客し、お弁当やおこわ、サンドイッチなどを販売しています。皆さんは喜んで活動に参加しています。毎日の売り上げは1万

円前後ですが、生きがいを持って頑張っていてくれています。

カフェの開会式典で矢口明子副市長は「様々な人たちが暮らすのが当たり前だ、と

いうことを市民が考えるきっかけになってほしい」と挨拶されました。丸山至酒田市長からは「市民に開かれた行政、庁舎、共生社会の推進につなげたい。障がい者が社会に広く参加し、羽ばたいてほしい」とコメントを頂きました。

「勉強になり、楽しい」と就労者

働いている障がい者の方々と法人の職員の声をお届けします。

「まだまだ慣れないけれども、楽しく接客しています。接客は苦手ですが、頑張っています」(佐藤洋美さん)。

「忙しい時はとても忙しいが、暇な時はとても暇。差が激しくて大変です。これからも頑張って、続けていきたいです」(佐藤皓太様さん)。

「接客業がわかってきて勉強になりました。やっていて楽しいです」(富樫和彰さん)。



開会式典にいられた酒田市の矢口明子副市長さん(中央)

障がい者と一緒に働いている法人職員の大滝由佳さんは、「何も分らない状態で始めたため、準備の段階では、かなり不安でした。それでも、たくさんの方に助けていただき、オープンすることができました。本当に感謝しています。オープン当初はそれなりに人がたくさん来てくれましたが、最近はお客様が減ってきて寂しいです。来ても、持ち帰りできる商品を買っていくだけの方も多く、座ってゆっくりしていいほしいなと思います。

障がい者就労支援カフェと銘打っているため、自分が障がい者と思われたこともありません。

一生懸命に励ましてくださる方もいる半面、バカにしたような態度をとられたこともあります。どちらにしても複雑な気持ちになります。

カフェの名前が、私が提案した『えーる』に決まり、愛着もひとしおです。これから酒田市民に定着してもらえるように、そして、利用者様の就労支援に役立つように、頑張っていきたいと思えます」と話しています。

(代表理事/齋藤緑)

『ふれあいねっと』は、個人正会員137人、個人賛助会員753人のほか、以下の法人・団体のご協力により、発行しています。

あいおいニッセイ同和損害保険(株)／(N)ウェアラブル環境情報ネット推進機構／(一財)高齢者住宅財団／(一社)コミュニティネットワーク協会／(公財)さわやか福祉財団／(N)さをりひろば／篠原保医療情報専門学校／(N)SSSネットワーク／(一財)全国勤労者福祉・共済振興協会／テクニカルコミュニケーションズインテリジェントジャパン(株)／(N)東京山の手まごころサービス／東友会関東支部／(N)ナイテングール／名古屋大谷高等学校／(一社)日本健康麻痺協会／(一社)日本産業カウンセラー協会／(N)日本心身機能活性療法指導士会／(一社)日本青少年育成協会／久光製薬(株)／(N)りすシステム／YKK AP(株)

※五十音順。(株)=株式会社、(有)=有限会社、(一財)=一般財団法人、(公財)=公益財団法人、(一社)=一般社団法人、(公社)=公益社団法人、(学)=学校法人、(N)=NPO法人



あなたの暮らしをもっと豊かに、生き生きと 公益社団法人長寿社会文化協会 **WAC** へ 入会しませんか！

WACはWonderful Aging Clubの略

楽しく年を重ねていきましょう！

個人賛助会員の年会費は3,000円
会員誌『ふれあいねっと』が届きます
(個人正会員の年会費は、10,000円)

●WAC会員の特典●

会員が安心してWACの活動に取り組めるよう、会員補償制度を設けています。

●ご入会およびお問合せ●

☎ 105-0011 東京都港区芝公園 2-6-8 日本女子会館 1 階 公益社団法人長寿社会文化協会
☎ 03-5405-1501 代

●年会費のお振込先●

ゆうちょ銀行振替口座 00150-1-33737 公益社団法人長寿社会文化協会

表紙の写真は：

右上隅 ●千葉県福祉ふれあいプラザで利用者を入れた自主防災訓練を実施 (P17)

右側の上から ●蕎麦打ちを体験する西大井いきいきセンターの来館者 (P20) ●スリー A 方式認知症予防ゲームをする北毛カルチャースクールの受講者 (P21) ●千葉県福祉機器展 (P16) ●コミュニティカフェ全国交流会でのグループ討論 (P12) ●第 8 回コミュニティカフェ全国交流会のチラシ

左側の上から ●芝の家を見学し、スタッフから話を聞く受講生 (P6) ●コミュニティカフェ全国交流会での開設講座受講生の発表 (P7) ●酒田市役所内の就労支援カフェで働く障がい者 (P22)

常務理事会の報告

Ⅱ WAC総会は6月28日(木)に開催

2018年度の第1回常務理事会を4月19日(木)に開き、前年度の会員異動、会計報告、事業報告案、今年度の事業計画案などを討議しました。

まず、2017年度の目標であった「総事業規模2億円」は、「川崎市介護人材マッチング・定着支援事業」の貢献により達成できたことが事務局から報告されました。

公益事業の千葉県福祉ふれあいプラザでは、総利用者数が3年連続20万人超えを達成し、開館以来の総利用者数が200万人を達成したと報告されました。利用料収入も前年度を上回り、千葉県による指定管理運営状況の評価で3年連続「優良」の総合評価を受けました。

続いて、港区アクティブシニア就業支援センター「みなと*しごと55」では、前年度の求職者、就職者数等における苦戦を強いられた要因と、今年度は結果につながる取り組みを強化していくとの報告がありました。

最後に、コミュニティカフェ事業においては、3月にコミュニティカフェ全国交流会を開催し約150人が参加し、開設講座受講生の発表、グループ討論を行い、盛況のうちに終わったとの報告がありました。

収益事業では、疑似体験事業において、高齢者疑似体験事業はほぼ前年度と同水準の売り上げであったが、認知症疑似体験事業は世間の関心を反映してか問い合わせが増え、売り上げが拡大したとの報告がありました。

また、2018年度事業計画案においては、一部修正の報告がありました。

最後に、3月理事会で決定した定時総会開催日6月28日(木)の日程確認と総会運営についての論議があり、新年度最初の常務理事会は終了いたしました。



2018年5月31日発行 通巻275号

発行人：升田 忠昭

編集人：浅川 澄一

編集：昆布山 良則、小山 環

発行：公益社団法人・長寿社会文化協会

〒105-0011

東京都港区芝公園 2-6-8

日本女子会館 1 階

TEL：03-5405-1501 代

FAX：03-5405-1502

制作：岡村直実 (JCユニット)

定価 400円 (税込)

「ふれあいねっと」バックナンバーのご案内

1冊400円(税込) + 送料(メール便)でお分けします。代金後払い(郵便為替・銀行振込、手数料お客様負担)です。在庫がなくなり次第販売終了となりますので、あらかじめご了承ください。

2018年1月号 (No.274)



- Message 「創立 30 年を機に原点返りの改革を断行」(升田忠昭 理事長)
- WAC 定時総会
升田忠昭さんが新理事長に
定款の一部改定、役員「任期 1 年」
議案は見送り
新役員一覧
- 主要事業の報告
川崎市介護人材マッチング・定着支援事業
千葉ふれプラの利用者数は累計 200 万人に
- ポイントからの活動報告
西日本各地で認知症高齢者疑似体験の研修会を行う「WAC ゆずり葉」

2017年3月号 (No.273)



- 巻頭言(須藤康夫 理事長)
- WAC ポイント探訪
笑顔弾ける 男の手料理教室
- ポイントからの活動報告
3 年連続でコミカフェ講座を開催
音楽で人の心を癒す
- 主要事業の報告
- オーストラリア視察報告
- ボランティアとオリンピック②
- 外国人技能実習制度に介護職が追加になることについて(須藤康夫 理事長)

2016年10月号 (No.272)



- WAC ポイント探訪
健康マージャンでいきいき! (WAC 豊齢健康の街づくり)
- 全国 WAC ポイント一覧
- 熊本の今を知る——支援活動報告(小林里美 常務理事)
- ボランティアとオリンピック①
- WAC 定時総会報告
高齢者疑似体験や第三者評価が健闘
前年度を上回る 367 万円の黒字に
- 主要事業の報告
- 惜別 下河辺淳初代会長が逝去

2016年6月号 (No.271)



- Message 「行政の『代行』と介護人材の育成に活路」(須藤康夫 理事長)
- 地域包括ケアを目指して
山形県酒田市の日本版 CCRC、千葉市のコミュニティカフェ
- 主要事業の報告
うらしま太郎はセット販売が大躍進
新総合事業に対応した研修を受託
第三者評価は 13 年で 196 件の実績
- 開設講座受講生が開いた 4 カフェをルポ
- ポイントからの活動報告
橋本市でコミュニティカフェ開設講座
ヘルパーの調理実習研修
- 惜別 国原徹さんが逝去
- 「編集長の眼」No.10

2016年4月号 (No.270)



- Message 「専業主婦から WAC と共に 20 年」(茶山ちえ子 常務理事)
- コミュニティカフェ開設講座 自主事業として 2 期実施
- 全国交流会で「コミュニティカフェプラン」発表
- 全国に広がる認知症カフェ
WAC が手掛ける認知症カフェ
千葉県で開設相次ぐ 4 カフェをルポ
- 主要事業の報告
「新しい総合事業」従事者養成研修を受託
元気高齢者向け施設を第三者評価
- 在宅介護フォーラムを東京と滋賀で開く
- 「編集長の眼」No.9 「『拠点型サ高住』に注目、地域包括ケアへの近道」

2015年8月号 (No.269)



- Message 「事務局として『裏方』に徹したい」(平野陽子 常務理事)
- WAC 定時総会
会長に京極高宣さん、理事長に須藤康夫さんが就任
前年度の収支 213 万円の黒字に
新役員一覧
- 全国の WAC ポイント一覧
- 主要事業の報告
「生活支援サービス研修」を始める
麻雀牌の「パイゲーム」
脳トレに効果、認知症予防に
- 「編集長の眼」No.8 「農家で認知症ケア オランダで大人気」

ご注文

お送り先の郵便番号、住所、電話番号、氏名、希望の号、冊数を下記までお知らせください。

WAC WONDERFUL AGING CLUB 公益社団法人長寿社会文化協会
E-mail : iken@wac.or.jp ● FAX : 03-5405-1502 ● TEL : 03-5405-1501